

2022年2月21日

## 令和4年度(2022年実施)試験「日本史B」について

## 1. はじめに

大学入試センター試験(以下、センター試験)と大学入学共通テスト(以下、共通テスト)の日本史はどこがどのように変化したのか。

この点を確認するため、センター試験と共通テストの日本史の出題形式を比較した表を示す。

	センター試験 (令和2年度)	共通テスト (令和3年度)	共通テスト (令和4年度)
大問数	6	6	6
大問のテーマ	第1問=テーマ史 第2問=原始・古代 第3問=中世 第4問=近世 第5・6問=近現代	第1問=テーマ史 第2問=原始・古代 第3問=中世 第4問=近世 第5・6問=近現代	第1問=テーマ史 第2問=原始・古代 第3問=中世 第4問=近世 第5・6問=近現代
大問の出題形式	第1問=学習場面(会話) 第2問~第6問=リード文	第1問=学習場面(会話) 第2問=学習場面 第3問=リード文 第4問=リード文なし 第5問=リード文 第6問=学習場面	第1問=学習場面(会話) 第2問=学習場面 第3問=学習場面(会話) 第4問=学習場面 第5問=学習場面(会話) 第6問=リード文
設問数(解答数)	36	32	32
設問形式	①空欄補充(6問) ②正誤判断(15問) ③説明文と語句の組合せ(3問) ④時代順整序(5問) ⑤資料読解(7問)	①空欄補充(3問) ②正誤判断(9問) ③説明文と語句の組合せ(4問) ④時代順整序(3問) ⑤資料読解(12問) ⑥語句選択(1問)	①空欄補充(2問) ②正誤判断(9問) ③説明文と語句の組合せ(2問) ④時代順整序(6問) ⑤資料読解(13問)

ここから次のことがわかる。大問数、各大問の出題テーマには変化がなかったが、大問の出題形式には大きな変化があった。従来のセンター試験では、冒頭にリード文が置かれ、その文中に引かれた下線部に関する設問や文中の空欄に語句を埋める設問などに答える「リード文形式」が主流であったが、「リード文形式」に代わって、共通テストでは、生徒の学習場面を想定した出題形式が増えた。また、設問形式にも変化があった。それは資料読解型の設問の増加である。

こうした変化は単に形式的な面にとどまるのか、それとも問題の内容にもおよんでいるのか、この点を以下で詳しく見ていきたい。

## 2. ポイント解説

## 2.1 「リード文形式」から「学習の場面を想定した出題形式」への変化

「学習の場面を想定した出題形式」とは、生徒が調べた内容を授業で発表をするために作成し

た資料や、授業で学んだ事柄について生徒同士が話し合う会話文が最初に示され、それに関連した設問が続く、という形式である。

日本史Bでは、この出題形式は共通テストで初めて登場したものではない。というのも、センター試験の第1問がこれに該当する形式だったからである。センター試験の第1問は、「主題学習」の名のもとに、生徒同士が歴史の特定のテーマについて話し合う会話文が冒頭に置かれていた。そして、その中に設けられた空欄に入る語句を選ばせたり、会話文中の下線部に関する問いに答えさせていた。

しかし、共通テストでは第1問だけでなく、他の大問にもこのような出題形式が取り入れられた。その結果、令和2年度試験では6大問中5問が「リード文形式」だったのに、令和4年度試験では「リード文形式」は第6問だけになった。これは、共通テスト問題作成方針の「高等学校における『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善のメッセージ性」を重視したためだと考えられる。

とはいえ、せっかく生徒の学習場면을想定した問題にしたにもかかわらず、問題に解答する上では、その学習場면을考慮しなくても、設問を読むだけで解答できるものがほとんどであった。

その例の一つが、令和4年度共通テストの第3問である。ここでは「中世の海と人々との関わりの歴史について関心を持った高校生のひろみさんが、先生を訪ねたときの会話」が示されているが、この会話は設問にほとんど関係なく、会話文全体を読まなくても解答できる問題となっていた。

従来の「リード文形式」においても、リード文全体を読まずとも、設問を読むだけで解答できる問題になっていたが、「学習の場면을設定する形式」に変えても、その点は変わっていない。大問の出題形式における変化は、現時点では形式面（外見）にとどまっているというのが、率直な評価である。

ただし、後で紹介するように、学習の場面が問題に解答する手がかりになっている設問も存在する。今後、そうした設問が増えていく可能性も考えられるだろう。

## 2.2 資料読解の問題の増加

共通テストとセンター試験の資料点数について、まとめたものが以下の表である。

年度	令和2年度 センター試験	令和3年度 共通テスト	令和4年度 共通テスト
資料点数	7	12	14

センター試験と比べて、共通テストでは資料の数が増加している。これは、資料読解の設問を増やしたためである。資料を読み解くには知識が必要であるが、それだけでなく、思考・分析・判断などの様々な能力が求められる。例えば、文字資料では、誰が誰に向けて書いたのか、いつ書かれたのか、何について書かれているのかなどを、文面や書名などから総合的に判断しなければならない。これは、資料が写真や絵画である場合も同様である。

加えて、センター試験であまり見られなかったタイプの資料が取り上げられているのが、共通

テストの特徴である。

センター試験で取り上げられた資料は、当時の日記や『日本書紀』など歴史書のような文字史料、そして写真・絵・地図などである。これに対して、共通テストでは、多様なタイプの資料が用いられている。

その中でも、特に注目すべきは、統計データを使った設問の登場である。統計データを使った設問がセンター試験で全く存在しなかったわけではない。しかし、2016～2020年の5年間で、統計データは2017年に出题例が1つ存在するだけであった。これに対して、令和3年度共通テストでは統計データを用いた設問が2つ、令和4年度共通テストでは3つ出题された。例えば、令和4年度で使用された統計データは以下の通りである。

- ・1925年～1950年の生まれ年別男性名ベスト3（第1問の間5）
- ・1885年～1930年の鉄道（国鉄・民営鉄道）の旅客輸送と営業距離の推移（第6問の間3）
- ・高度経済成長期以降の鉄道・自動車の旅客輸送量と乗用車の保有台数（第6問の間6）

また、統計データではないが、第6問の間2では、1872年に開通した新橋－横浜間の9月の時刻表が資料として取り上げられている。これも入試問題の資料としては珍しい。

選択肢の正誤判断や時代順整序の設問と比べると、資料読解の設問では、受験生が読むべき文章や資料の分量が単純に増加するので、解答に時間がかかる。特に、統計データを用いた資料の場合、個々の選択肢の内容の正誤を判断するためには、その内容を理解するだけでなく、統計データの該当の数字と照らし合わせて確認する必要がある。

その代表的なものが、第6問の間6である。上述のように、1960年から1985年に至る、鉄道と自動車の旅客輸送量（百万キロ）、乗用車の保有台数（千台）、高速道路延長（km）を示す表、および1964年から1985年に至る「主要な新幹線・高速道路の開通」の表が示される。4つの選択肢はこの表について述べた文である。4つの選択肢の正誤を判断するためには、日本史の知識と、表から読み取る事実を組合せなければならない。

例えば、選択肢②は「日本で最初に開かれたオリンピックの開催までに、東京－大阪間には、新幹線・高速道路が全線開通した。」とある。日本最初のオリンピック開催は1964年。表を見ると、1964年には東海道新幹線が全線開通しているが、東京－大阪間の高速道路が全線開通するのは、1965年の名神高速道路全線開通になってからである。したがって、これは誤文。また、③は「第1次石油危機の後、自動車の旅客輸送は減少した。」である。第1次石油危機は1973年。表を見る限り、その前後において自動車旅客輸送に減少は見られず、一貫して増加している。したがって、これも誤文。このように、表の数値を細かく確認しなければ、選択肢の正誤が判断できず、受験生の手間が増加している。

さらに、資料型の設問が増加したことは、令和4年度共通テストの平均点が大きく低下したことの原因の一つだと考えられる。令和4年度共通テストの平均点は52.81点であり、令和3年度共通テスト（64.26点）や令和2年度センター試験（65.45点）と比べて10点以上の低下である。これは、試験時間が変わらないのに、問題を解くのに必要な時間が増えたことが影響していると推測できる。

### 2.3 思考力・判断力で解答する問題の増加

センター試験では日本史の知識をしっかりと身に付けているかどうかを問う問題がほとんどであった。これに対して、共通テストでは、知識だけでなく、知識と思考力・判断力を組み合わせて解く問題が登場した。

第1問の問1は、空欄アとウに入る文の組合せを選ぶという問題である。このうち、空欄イに何が入るかは日本史の知識がないとわからない。該当箇所は次の通り。

明治時代になると、政府は  のために、平民にも苗字を名乗らせた

選択肢は「華族・士族・平民の身分を撤廃する」「近代国家の国民として把握する」の2つ。正解は后者であるが、これは教科書に明記されていない。前者が誤りなので、消去法で正解にたどり着くことができる。しかし、前者が誤りだと判断するためには、教科書にある明治の四民平等についての知識が必要である。

これに対して、空欄アは日本史の知識がなくても正解にたどり着くことができる。第1問では二人の高校生の会話が冒頭に置かれているが、空欄アの前の部分で、生徒の一人が「小野妹子（おのの／いもこ）」「北条政子（ほうじょう／まさこ）」のように、名前に「の」があったり、なかったりするのとはなぜかという話題を提示する。これに対して、もう一人の生徒が「姓」と「苗字（名字）」の違いをまとめたメモを示す。このような流れを受けて、次の会話が続く。

北条政子は  だから、「の」がつかない

なお、選択肢は「苗字（名字）＋名（個人名）」「姓＋名（個人名）」の2つ。

「北条政子」に「ほうじょう」というように「の」がつかない理由は、教科書には書かれていない。また、「北条」が苗字（名字）なのか姓なのかも、教科書の知識だけでは判断できない。

しかし、会話文中に提示されたメモには「平安時代に姓（かばね）が形骸化して、姓（せい）は専ら氏（うじ）を指すようになった。」「平安時代以降、源・平・藤原・橘が代表的な姓」とある。これを踏まえて、生徒は「姓は、やがて氏と同じものになるけど、苗字とは違うものだった」「北条政子の場合、平氏の一族であり、平政子が正式な名前と考えられている」とまとめている。

以上の会話文の記述を踏まえれば、「平政子」という場合の「平」は「姓」であり、「北条政子」という場合の「北条」は「苗字」だとわかる。

このように、与えられた資料と会話文をしっかりと読み、論理的に考えれば、正解にたどり着くことができるという問題は、従来は見られなかった新しいタイプの問題といえる。これは、センター試験が知識偏重型であるとの批判を受けての改善だと考えられる。

しかし、日本史の知識が十分に身につけていなくても、国語的な読解力で解くことができってしまう問題であるとも言える。はたして、これが日本史における思考力・判断力と言ってよいのか、議論の余地があるだろう。

これと似たようなタイプの問題として、第1問の問5が挙げられる。これは、「1925年～1950年の生まれ年別男性名ベスト3」という表が資料として提示され、この表から読み取れる内容に関

する文X・Yの正誤の組合せを選ぶというものである。

文Xは以下の通り。

アメリカ・イギリスに宣戦布告し戦場が拡大すると、勝利を祈願するような名前が優勢になる。

日本史の知識があれば、「アメリカ・イギリスに宣戦布告」が太平洋戦争を指すことがわかるだろう。1941年12月8日、日本軍は真珠湾などを奇襲し、アメリカ・イギリスに宣戦布告して太平洋戦争が開始された。

一方、表を見ると、1942年のベスト3が「勝・勇・進」であり、以下、1943年は「勝・勇・進」、1944年は「勝・勇・勝利」、1945年は「勝・勇・進」となっている。太平洋戦争は1945年に終結し、それ以降のベスト3からは「勝」も「勇」も姿を消す。つまり、戦争の期間と、「勝利を祈願するような名前」が優勢になった時期は一致する。したがって、正文と判断できる。

文Yは以下の通り。

天皇の代替わりにもなう改元の影響もあり、新元号の一字を冠した名前が登場する。

1925年～1950年の期間において、天皇の代替わりがあったのは1926年であり、「昭和」と改元された。

表を見ると、1927年（昭和2年）のベスト3が「昭二・昭・和夫」、1928年（昭和3年）が「昭三・茂・昭」である。なお、1926年（昭和元年）は「昭和」の期間が7日しか存在しないので、名前のベスト3には反映していない。以上のことから、文Yも正文と判断できる。

この問題は、日本史の知識（太平洋戦争があったのはいつか、改元が行われたのはいつか）と、資料から読み取ることができる事実を組み合わせることで解答させるものである。知識がなくては解答できない問題となるように工夫されている点は評価できる。ただし、資料の読み取りとしては、名前に使われている漢字を見るだけで済む。その意味で、必ずしも複雑な読解力が求められているわけではない。せつかく資料を提示するのであれば、もう少し資料を丁寧に、かつ深く読み込まないと解答できないような問題となるのが望ましいだろう。

### 3. まとめ

センター試験から共通テストへと変わった結果、日本史においては「リード文形式」を「学習の場面を想定した問題形式」に変更したり、設問全体に占める資料読解型の問題の割合を増加させたりするといった工夫が見られた。さらに、これらの形式的な変化だけにとどまらず、問題の内容面においても、日本史の知識に加えて、思考力・判断力を用いて解答する設問が登場するといった変化も見られた。しかし、後者については分量的にも極めて少なく、また、思考力・判断力といっても、国語的な読解力で十分に対応可能なレベルのものであった。実際、日本史で取り上げられる事項について、その歴史的背景や相互の関連性、後世へ与えた影響などを総合的に思考・判断させるような問題（言い換えれば、日本史的な思考力・判断力を問う問題）を作成するのは、一朝一夕にはいかない。今後、共通テストで見られた新しいタイプの設問が増加し、さら

に内容的にも日本史的な思考力・判断力を問うものになっていくのかどうか、注視していきたい。

参考資料

- ・「令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」  
大学入試センターホームページより